

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 14 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520488

研究課題名(和文) ムンダ語のクレオール化メカニズムに見る、言語構造の歴史的变化に関する類型論的考察

研究課題名(英文) Typological Accounts for Historical Changes of Linguistic Structures Reflected on Creolising Mechanisms of Mundari

研究代表者

藤井 文男 (Fujii, Fumio)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：40181317

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代ムンダ語の口語データを収集するフィールドワークとデータ分析に基づいて文法構造の体性を明らかにすることを主目的とした。具体的にナグリ方言を対象とし、研究者は東インドのジャールカンド州州都 Ranchi を5回ほど訪れて調査を実施した。

当該言語は本研究以前が手懸けていたが、本研究によってその文法構造の記述などの点で相当の理解が進み、他動詞性標識として既に知られていた -n vs. -d に加え、印欧語に見られる -o vs. -e といった Ablaut に相当するような“屈折”も示すなど、新たな発見があった。主たる成果は文法上の一一致に関する単行本として出版するところとなった。

研究成果の概要(英文)： This research mainly aimed by means of fieldwork at collecting vernacular data of Modern Spoken Mundari and at analysing them with regard to its grammatical structures in order to illuminate its systemicity. Concretely, the Naguri dialect of this language was investigated. For this purpose, the researcher visited Ranchi, the capitol of Jharkhand state of East India five times during the research period in order to launch fieldwork.

Although the researcher had begun investigating this language in the framework of the former research project, the description of its grammatical structures progressed rather rapidly in the very period of the current research; concretely, a kind of inflection similar to the so-called "Ablaut", -o vs. -e was discovered as marking transitivity morphologically at the verbal expression in addition to the well-known distinction between -n and -d. Main results have been published in the form of a monograph on the phenomenon of grammatical agreement.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：言語の類型 言語の構造 言語の系統 言語の歴史的・地理的变化 言語接触 クレオール化 言語学的フィールドワーク 言語の普遍性

1. 研究開始当初の背景:

本研究は、やはり科研費の援助による「モン・クメール諸語間の統辞構造の差異に見る言語変化メカニズムに関する類型論的考察」と題する前研究を継続・発展させるべく企画されてものであり、基本的に東インドを中心に行なわれるムンダ語の、フィールドワークによるデータ採集とその記述により、当該言語の体系性をビジュアルに浮き彫りにしようとするものであった。

研究者は既に前研究の時点からムンダ語の記述を手懸け、個々の統辞現象に関してはそれまで恐らくは言及されたことのないものも含めて相当程度、ムンダ語ナグリ方言の実態に迫ることができてはいたものの、そうした個々の現象が全体としてどのように相関関係を成しているか、つまりこの言語の“体系性”については残念ながらイマイチ釈然としないものが残っていた。

2. 研究の目的:

本研究は、研究者本人によるこれまでの研究も含め、こうした旧来の文法記述にありがちだった“個別現象”に特化した、あるいは Reference Grammar 的記述を網羅しつつも、最終的には当該言語の体系性を浮き彫りにするだけの問題意識が明確化されていない現況を好転させるべく企画されたプロジェクトで、個々の統辞現象に通底する、理論的にはより上位の“カテゴリー”を意識した文法記述と記述対象が示す文法構造の体系的整合性に関する理論的考察を可能にする問題意識を踏まえた調査活動を展開することを目的とする。

具体的には例えば、いわゆる「テンス・アスペクト」をマークする *kan-/kad-* が *-n-* vs. *-d-* で “transitivity” をマークするのに対し、*ke-* や *re-* など主に未来のコンテキストで現われる助動詞にはそもそも *-n-* や *-d-* といった接辞が現われず、transitivity に関するマーキングがどうなるのか調査が十分に成されていない点(あるいは問題意識を持って調査しても合致するデータが上がってこないこと)や、現在時制では自動詞構造とも他動詞構造とも共起する *tan-* “Progressive” は、*senog* ‘to go’ などの典型的な自動詞とは“未来時制”では問題なく共起するのに、*jom* ‘to eat’ といった他動詞とは全く共起できなくなってしまうなど、体系的な観点からすると極めて不整合な、idiosyncrasy としか言えない統辞現象について、幾多の謎が残っていたが、こうした“不規則性”に対して納得のいく説明を与えること、即ちこの言語の体系性を浮き彫りにできるだけ言語データを積極的に収集し、且つそうした観点からの記述を進めることで、この言語が実態としてはどのように機能するかを明らかにする、説得力ある理論構築のための基盤構築を目的とする。

3. 研究の方法:

上の記述でも示したように、本研究は言わば「前研究の集大成」的位置づけにある。実際、前研究終了時での認識でも、上述したような「記述上、当該言語の構造的体系性が見えてこない現実」も、個々の統辞現象自体はある程度、把握していても研究者自身が未だ、この言語の体系的機能性についての把握が単に不十分なだけであり、機能性に完全には納得できない個別の統辞現象そのものは認識できていても、それらを繋ぐ“何か”に対してまだ見通しが利かない状況にあることは自ら察しがある程度は付いていた。

従って本研究では、前研究からの経験を生かせる状況にあったことから問題点を整理して調査に臨めるなど、これまでより遙かに有利な条件が整っていることもあったが、基本的に調査方法としては前研究までの同様の、「インフォーマント・インタビュー」によるオーソドックスなフィールドワークの手法を踏襲した。対象とする方言に関しては十分な先行研究が整っていないという点に関しては今回も好転しているわけではなく、研究者が現地に赴いて伝統的なフィールドワークを行なうというスタイルは基本的に変わっていない。

また、2012年度はたまたま学内でサバティカルを利用できたことから例外的に前期間に現地調査を組み込めたが、基本的には前研究と同様、彼地の乾季(日本の冬)に小刻みな出張を繰り返す形の調査となったため、収集したデータは帰国後に分析し、その結果を基に次の調査のための質問票を準備するのが理想的ではあるものの、調査時のインタビューでの展開はやはりあまりにも速く、質問票は実質的には主に彼地で準備することがほとんどとなった。(ただし、焦点を絞ってのインタビューができるほどにゆとりが出てきたため、結果的には極めて整然とした調査が可能だった。)

本研究の枠組みで行なった現地調査は、実際には以下の通りである:

- 1) 本調査 : 2012/02/27 - 03/19
- 2) 本調査 : 2012/05/17 - 06/06
- 3) 本調査 : 2012/12/21 - 01/07
- 4) 本調査 : 2013/03/01 - 03/22
- 5) 本調査 : 2014/02/26 - 03/22

なお、前研究までに比べて出張回数が減り、代わりに滞在期間が長くなったのは、本研究の開始時期とほぼ前後して、インドを旅行する外国人に対し「インド出国が次の入国まで最低でも二ヶ月のインターバルを挟まなければならない」との、いわゆる“二ヶ月ルール”をインド政府が設けたことに連動している。(冬の時期、つまり後期授業終了後の試験の入試業務の間を縫うように出張計画を立てていたが、このルールにより計画立案がかなり面倒になった。)

4. 研究成果:

本研究で設定していた目的は、総体的に見て実質的に十二分に達成できたと考えていい。上でも記したが、個々の言語現象は前研究終了時にはかなりのところまでその実態が明らかとなっていたが、そうした個々の現象を繋ぐ“架け橋”的位置づけになる、「研究の目的」で“カテゴリー”と表現していたものの実態が、相当のところまで明らかになったからだ。本研究ではこれを結論的に、一種の「言語記号」と位置づけ、個々の具体的な文法のカテゴリーの「上位概念」「上位カテゴリー」との解釈を行なう。

具体的には例えば、上掲「研究の目的」で触れた「進行相をマークする *tan-* が未来時制的環境では、『現在進行形』を表わすケースでは問題のない他動詞系動詞語彙と共起しない」という“不規則性”が問題だったが (cf. *naqa* ‘now’; *gapa* ‘tomorrow’):

- (1) a. Mangra **naqa** mandzi bai *tanae*.
b. *Mangra **gapa** mandzi bai *tanae*.

(1b) でも例えば *Somrilain* ‘for Somri’ のように “benefactive” を想定して 動詞語彙をこれに一致させれば、次のように問題なく共起するようになる:

- (2) a. Mangra **naqa** mandzi bai**ai** *tanae*.
b. Mangra **gapa** mandzi bai**ai** *tanae*.

つまり、描写対象が一過性や偶然に基づく動作ではなく、かねてから予定していた計画性のある動作であれば、ムンダ語は英語などが一部の自動詞などで可能となる「(代替) 未来表現」が表出できるようになるわけだ。

本研究ではこれを「計画未来」とでも名付け、「単純未来」や「意志未来」と対比させるが、これは “benefactive” を想定した「意味カテゴリー」と“目的語との一致”という機能を担う「構造的属性」の別種のカテゴリーが生み出す、新たな「記号」なのだ。具体的にはつまり、「計画」を表わすのであれば *bai tan-* ‘to be cooking’ のような他動詞構造も現在表現と同様、“自動詞化”できるのである。

こうした言語現象は、これまでのような単純な “benefactive” といった「意味役割」と “agreement” などの「統辞構造」に纏わる個々の現象をいくら調査・分析しても発想だにできなかったわけで、ムンダ語 (ナグリ方言) はその意味で、他の言語では自明ではない「文法のカテゴリー」を持ち、これを“記号”と位置付けていることが明らかとなる。

個別にはこの問題は更に、上でも暗示したような “benefactive” がない場合、ムンダ語は何故 *bai tan-* のような他動詞構造は一般に許容されないか? といった、ナイーブな問題にも十分、光を当ててくれることになる。ある意味では “コロンブスの卵” 的な問題で

もあるが、この言語は実はそんな場合でも他動詞語彙と共起できる「計画未来」の “transitive version” を別立てで用意しており、それには未来を表わす助動詞として *tan-* を使わず、この方言では *taq-* を充てているのである。研究者の側で「計画未来」といったカテゴリーを認識できていないと、現実の調査時でも *kiring taq-* ‘to plan to buy’ などのデータに遭遇していながら **senog taq-* (‘to plan to go’) が文法的に成り立たないことをチェックする才覚さえ失わせてしまうのである。

本研究では、こうした「体系性」の概念に絡む懸案の数々が解決できた。具体的な成果としては「概要」でも触れた単行本『ムンダ語に於ける Grammatical Agreement から見る言語の “構造的機能性”』に言及するに留めるが、既に前研究でもある程度はその実態が明らかとなっていたムンダ語に於ける “Ablaut” の現象に関しても、“transitivity” をマークする -o- vs. -e- という音韻対立は、*ke-* vs. *kø-* ‘shall’ などの助動詞的表現に留まらず、*mailax-oq-* ‘to become dirty’ vs. *maila(x)-eq-* ‘to make dirty’ などのように、動詞語彙表現の根幹に関わる、極めて重要な体系的側面があることが明らかになっている。

このように、「(当該個別) 言語は体系的にはどのように機能するか?」といった、言語学のある意味では “究極的” な問題意識について、本研究は相当程度、その本質に迫る結果が出せたと考える。

5. 主な発表論文等:

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

藤井文男, 「“Transitivity” とは何か? ムンダ語に於ける自動詞 vs. 他動詞の弁別性に見る「文法の範疇概念」とその体系性」, 茨大人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』12 (2012), pp. 63-85 [査読なし]

藤井文男, 「自然言語は如何にして表現の “カテゴリー” を設定するか? ムンダ語に於ける Agreement 現象が物語るもの」, 茨大人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』13 (2012), pp. 59-87 [査読なし]

〔学会発表〕(計1件)

藤井文男, 「動詞中置はクレオール化に於ける必然なのか? 言語地域としての大東東南アジア」, 公開シンポジウム『アジアとアフリカの言語地域』(日本言語学会第146回大会 於 茨城大学, 2013/6/16)

〔図書〕(計1件)

藤井文男 『ムンダ語に於ける Grammatical Agreement から見る言語の “構造的機能性”』, 相模原: 現代図書 2014, 240 + xii pp.

〔産業財産権〕
出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織：

(1) 研究代表者

・藤井 文男（FUJII FUMIO）
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号： 40181317

(2) 研究分担者

（ ）

研究者番号：

(3) 連携研究者

（ ）

研究者番号：